

次の文章は、四人で演奏するリコーダー・アンサンブルのメンバーである中学一年生の「私」と西澤とが、音楽室で練習する場面を描いたものである。これを読んで、後の問いに答えなさい。

ああ、いい音だなあ！

もともと、リコーダーは、^(注)テナーやバスの低い音が好きだ。広がりのある深い音。ああ、でも、本当に、なんていい音を出すようになったんだろう。春の頃、男子の出す音は違うと悔しかった。それから半年練習して、もはや、男子の音 じゃなくて、西澤の音 だった。すぐそばに人がいることにも気づかずに吹いている真剣な横顔を見ていると、私はまだまだまだ練習が足りないと思った。

「おー。」西澤は吹き終えて、私に気づくと、たいして驚いたふうでもなく、うなずいた。

「うまくなったね。」私は心から言った。「西澤くん、ほんとにうまくなったね。なんか、ここんとこ、だんぜんうまくなったね。」

「そうか？」いつもの無表情が心なしかゆるんだ。

「毎日、練習してるんだって？」

「うーん。」否定だか肯定だかわからない返事がかえってきた。低い声。西澤は最初に会ったときからもう声変わりしていて、地声も楽器のパートのようにバスだ。「山口、今、暇ある？」

西澤の問いにうなずいた。私も練習に来たと言う前に「^(注)アリア、吹いてくれる？」と西澤は頼んだ。

「いいよ。」

へ 西澤が出してきたリコーダー・ケースにソプラノが入っている。私は組み立てて、西澤の隣に座った。不思議な気がした。ソプラノとバスの間には、いつも、アルトとテナーが入る。一番離れている二人なのだ。音も一番離れている。ソプラノとバスだけで吹くアリアは、それも、どこか不思議な感じがした。違う曲のような。足りない音が多すぎて、スカスカのような。

「うん。」でも、西澤は満足そうにうなずいた。「やっぱ、吹きやすい。いつも、おまえの音についていってるからな。」

² 私は思わずため息をもらした。

「私さ、そういうリードする柄じゃないじゃない。」

「ガラ？」

「えー、だから、みんなを引っ張るみたいなのさ、千秋のほう^{ちあき}が向いてるでしょ。ソプラノさ、千秋のほうがいいんじゃないかって、ずっと思ってた。」

「高田はアルトじゃないか。」西澤は当たり前前のことを当たり前のように言った。

「千秋ならソプラノできるよ。私、アリアがぜんぜんうまく吹けなくて。聴かせる演奏ができなくて。メロディーが歌えないんだ。一生懸命吹い

でも、なんか、こう、感情表現ができてないんだ。」愚痴ぐちというより本音だった。千秋にも言えずにいたことを、なんで西澤にふつとしやべってしまったのか、わからない。

「ソプラノは、おまえだから。」西澤は、また当たり前のように言った。こいつ、人の話聞いてるのか、理解してるのか、と、私はムツとした。〜

「山口のソプラノだから、俺おれらはついていける。」黒い四角い縁の眼鏡の奥の目は、淡々としていた。

「もう一回。」西澤はうながすようにうなずいた。

——山口のソプラノだから。西澤の低い声が、しんと胸にしみた。

私のソプラノ？ 吹きながら考えていた。なんだろう、それは。

西澤が、中原が、千秋が、まず、私のソプラノに合わせてそれぞれの音を出す。その主旋律を担になう役として、とりあえず 正確 でいいのかもしれない。信頼があるのなら。西澤がそう言うのなら。

演奏会じゃないんだから。私の、私たちの演奏を聴くために人が集まるんじゃないから。主役は、卒業生。私たちは、三年生を気持ちよく送り出すための役割の一つに過ぎない。卒業証書授与のときの (注) BGM。

一番大事なのは、とぎれないこと。間違えないこと。安定していること。むしろ目立ち過ぎないほうがいい。控え目に、ひそかに美しいのがいい。そう思うと、何かがふつきた。

³ うまく吹こうという力みがとれたとき、長く伸ばしたゆったりした音の中に静かな感情がみなぎった。最初のミの音がかつてなく透明に響いた。吹きながら、自分自身が自分の出した音の中に吸われていくような集中。続く四度高いラの音がすつきりと出た。(注) トリルがただの飾りじゃなくて、細かい二音の繰り返しにきりつとした意味がある。情緒豊かに吹くことと、正しい技術で吹くことは、違う作業じゃないんだと思う。西澤が吹きながら、私の顔を見た。彼が私の変化を感じ取ったことを、私はわかった。

「第二音楽室」(佐藤多佳子) による。

(注) テナー⇨テノールのこと。

アリア⇨ここではバッハ作曲の「G線上のアリア」をさす。

BGM⇨雰囲気づくりのために流す音楽。

トリル⇨二音を交互に素早くふるわすように演奏する音。